博士論文要旨

陳述副詞成立過程の類型性

東北大学大学院文学研究科　日本学専攻
日本語学専攻分野　姚尭

本論は、日本語における漢語陳述副詞を対象として、それぞれの歴史的変遷の様相を明らかにするとともに、「モジュール化」というアプローチを以て、陳述副詞の成立過程の類型性を追究するものである。

従来の研究において、副詞の歴史的変遷を叙述するための主なアプローチは「語史的」アプローチと「語彙史的」アプローチの 2 種類ある。この 2 つのアプローチにより、個別語の語史が解明され、語史の背後に隠された方向性・規則性もある程度分かるようになったが、依然としてある種の中間成果と見受けられる。そこで本論では、副詞の歴史的変遷を、上記 2 種類のアプローチと異なる「モジュール化」のアプローチで叙述することを試みる。副詞の変遷過程に見出された類型性を「モジュール」という概念で捉え直し、副詞の成立過程がどのようなモジュールに分けられるのか、これらのモジュールがどのように働き、どのように組み合わさって各種類の副詞を作り出すのかを提示するとともに、新たな言語変化の研究法として、「モジュール化」のアプローチがどのような意味・価値を有するのかを明らかにすることを目的とする。

第 1 部「序論」では、上述のような研究背景を踏まえ、本論の目的と理論的立場を明らかにし、考察対象、研究方法を述べた。また、これまでの陳述副詞の先行研究を概観した上で、陳述副詞の歴史的研究に関する問題提起を行った。

第 2 部（第 3〜7 章）「陳述副詞副詞化各論」では、「折角」「一体」「一旦」「所詮」「是非」の 5 語を各章で取り上げ、類似語と照らし合わせながら、それぞれの歴史的変遷と変化の類型性を考察した。

「折角」の通時的変遷においては、「メタファーの生起」「連用修飾機能の獲得」「従属節における使用」「主観化」という 4 つのメカニズムが働いている。これを副詞「到底」「一体」「如法（に）」「抜群」「なまじ」「せいぜい」の成立過程と照らし合わせてみれば、これらのメカニズムは各語の変化過程に共通して見られ、ある程度の類型性を有することが分かった。

「一体」の通時的変遷においては、「メタファーの生起」「文修飾機能の獲得」「後続文の性格変化」「疑問文における使用」という 4 つのメカニズムが働いている。「全体」「惣体」「大体」「一体全体」など〈一まとまり〉の意味を持つ語も同様にこれらのメカニズムによって陳述副詞として成立することになる。［一まとまり＞全体、全般＞本質、根本＞本質的に、根本的に＞そもそも、もとから＞はたして］という意味の変化、および［名詞＞説き起

こしの副詞＞詰問追究の副詞］という品詞の変化は、これらの語に共通して見られる歴史的変遷のパターンである。

「一旦」の通時的変遷においては、「意味の抽象化」「主観化」「「(X、）一旦 Y、Z」構文における使用」「仮定節における使用」という 4 つのメカニズムが働いている。「一度」「一朝」「一回」など〈短期間〉の意味を持つ語も同様にこれらのメカニズムによって陳述副詞として成立することになる。〈短期間〉を示す時間名詞が時間副詞の段階を経て、仮定条件を導く陳述副詞に転化するということは、陳述副詞の成立過程の 1 つのパターンである。

「所詮」の通時的変遷においては、「意味の抽象化」「文修飾機能の獲得」「後続文の性格変化」「否定的な内容との共起」「条件・原因節における使用」という 5 つのメカニズムが働いている。「結句」「結果」「結局」など〈結論・結果〉の意味を持つ語も同様にこれらのメカニズムによって陳述副詞として成立することになる。〈結論・結果〉を示す名詞が結論提示の副詞の段階を経て、話者の否定的評価を表す副詞に転化するということは、陳述副詞の成立過程の 1 つのパターンである。

「是非」の通時的変遷においては、「語彙化」「慣用句における使用」「慣用句の凝縮」「敬意表現との共起」「主観化」という 5 つのメカニズムが働いている。「善悪」「有無」なども同様にこれらのメカニズムによって陳述副詞として成立することになる。対義並列構造が慣用句における使用、および慣用句の凝縮により陳述副詞に転化するということは、陳述副詞の成立過程の 1 つのパターンである。

第 3 部（第 8〜12 章）「陳述副詞における副詞化のモジュール」では、「モジュール」という概念を提示し、副詞化の類型性を解明するために「モジュール化」というアプローチがどのような意義を有するかを論じた。そのうえで、第 2 部で取り上げた実例を踏まえ、陳述副詞の成立過程に見出された類型性を「モジュール」という概念で捉え直し、各モジュールの定義と働きを考察した。

陳述副詞の成立過程に見られる類型性は、次のように 4 種類、8 つのモジュールに分けることができる。

① 語形成に関するモジュール：語彙化
② 意味変化に関するモジュール：メタファーの生起、意味の抽象化、主観化
③ 統語機能変化に関するモジュール：連用修飾化、文修飾化
④ 使用環境、共起成分に関するモジュール：後続文の性格変化、共起関係の固定化

このように、一連のモジュールのあり方および組み合わせ方を解明することを通じて、各種類の副詞がどのように成立したのかをより平明に説明することができた。副詞の歴史的変遷を叙述する際に、「モジュール化」という新たなアプローチは変化の類型性をまとめる上で有効な方法であることが分かった。

第 4 部「結語」では、上記の結果を踏まえ、本論の意義、ならびに今後の課題について述べた。本論の意義として、①陳述副詞の成立のプロセスとメカニズムの解明、②陳述副詞の成立過程の類型性の提示、③「モジュール」という概念の導入、④「モジュール化」という

新たな副詞の史的研究のアプローチの提言という 4 点が挙げられる。また、今後の課題として、①より多くのモジュールの収集、②各モジュールについてのより精緻な分析、③漢語陳述副詞から全種類の副詞、さらに他の品詞への適用、④日本語以外の言語との比較研究という点が残されることを指摘した。

論文審査結果の要旨および担当者

提　　出　　者	姚　尭
論文審査担当者	（主査）教授　　大木一夫 教授　　小林隆 教授　　甲田直美 准教授　木山幸子
論　　文　　名	陳述副詞成立過程の類型性

本論は、日本語における陳述副詞、なかでも漢語陳述副詞を対象として、それぞれの語の歴史的変遷を明らかにし、それにもとづき、陳述副詞の成立過程の類型性を描き出す論文であり、全体を4部に分かち、全13章から構成される。

まず、第1部「序論」は本論文の目的・対象・方法を述べ（第1章）、また、これまでの陳述副詞の研究史を検討し（第2章）、本論における議論の展開の基盤を整える。

つづいて第2部「陳述副詞副詞化各論」においては、日本語において、元来、陳述副詞ではなかった漢語が副詞となり、さらにそれがとくに陳述副詞に転ずる過程を明らかにする。対象となる語は「せっかく（折角）」（第3章）、「いったい（一体）」（第4章）、「いったん（一旦）」（第5章）、「しょせん（所詮）」（第6章）、「ぜひ（是非）」（第7章）の5語である。いずれの章においても、文献日本語史の手法に忠実にしたがい、これらの語の変化の過程を精細に明らかにしている。

第3部「陳述副詞における副詞化のモジュール」においては、陳述副詞の成立過程の類型性について考察をすすめる。第2部での検討にもとづくと、陳述副詞の成立過程には一定の類型性があると考えられる。そこで、その類型性を描き出そうとするのがこの第3部である。ここにおいては、第2部で検討した語のほかにも分析対象とする語例を増やしながら、陳述副詞の成立過程を、さまざまな陳述副詞化に共通してみられる一定のまとまりのある変化過程に分解し、その組み合わせ方によって異なる性質をもつ副詞が生まれるという把握をおこなう（第8章）。この変化過程のまとまりを副詞化の「モジュール」と呼ぶが、このようなアプローチで陳述副詞の成立過程の類型性の考察をすすめ、まずは、いかなる「モジュール」があるのかということを、意味変化の側面（第9章）、統語変化の側面（第10章）、共起成分の変化の側面（第11章）から剔出し、ついで、副詞化の過程における「モジュール」の組み合わせかたの違いによって、生み出される副詞の性質が異なってくることを論じている（第12章）。

最後に、第4部「結語」として、以上のようなアプローチがもつ意義と今後の課題を述べ、本論を締めくくる。

本論文は、言語変化の類型性を考察するアプローチとして、言語変化の「モジュール」という新しい考え方を導入し、丁寧な語史把握を基盤として、日本語における漢語陳述副詞の成立過程とその機構を精緻に解明した論文である。この成果は、日本語文法史研究、また、言語変化研究に大きく寄与するものといえ、高く評価される。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。